YDG
Defence Ops P
92-43
DOPU
少女傭兵

DOPU～少女傭兵～

筆者名：jack-raven
発行サークル名：ＪＲ４４

Girl mercenary
D.O.P.U.

注意

本作にはグロテスクな描写が含まれます。あらかじめご注意下さい。
本作はフィクションです、描写される全ての出来事は実在する人物、団体、国家、あらゆる事象とは一切関係が無い架空の物です。
作中の行為は現実世界では当局の定める法令に違反する可能性があります。
本作は一般読者に対して娯楽目的で製造及び提供された物でありその範疇を逸脱した行為に本作を利用するのはお辞め下さい。

以上に同意頂ける場合のみ、本作をお読みください。

それでは本作をお楽しみ下さい。

キャラクター紹介

百合帝高等戦術女子学園（ゆりだい）

DOPU（Defense Ops , Private Unit）

「防衛作戦従事民間委託部隊」

「YDGH63 ムラハチ班」

■リッパー

歩兵科 3 年生

本名 坂本一輝

ムラハチ班班長。

何時もナイフを手放さない切り裂き魔。近接において本領を発揮する。

また戦闘において的確に指揮を行い、各員の能力を活かす事が出来る。

敵には辛辣で容赦ない。出生等不明、暗殺業を行っている噂がある。

■ツーチー

通信科及び情報科 2 年生

本名 槌谷呑子

正統派ヒロインの風格を持つ無線手兼電子戦担当。

生まれながら計算とコンピュータの扱いに優れ電子戦や経理サポートを担っている。大人びた雰囲気だが年相応の女子高生。

現在家出中。

■エリカ

特殊戦科 2 年生

本名 エリカ・ニクソン・佐原

ムラハチ班の歩兵機動車 GAZ-233014 ティーグルの運転手と分隊支援手を担当するモデル体型で長身の生徒。

運転において車を自身の身体の一部の様に自在に操る。知的な見た目をしているが性格は高飛車で男勝り。

厳しい世界でも楽しもうとしてる。陽キャ。

母親がイギリス人。なので上品なイギリス人を演じてる。

■エブリン

特殊戦科 2 年生

本名 イヴリン・アクーラ

狙撃担当の真面目ちゃん。

狙撃において優秀。中距離以内で有れば的確で高精度の射撃を繰り出す。母親が日本人で父親がロシア人。

寂しがり屋の甘えたがり。

■マリ

武器科及び施設科 2 年生

本名 幡里まり

爆破とメカニック担当。夢は東京新タワーを粉微塵に解体する事。

戦闘技能やタクティカルな動きの自信が薄い故に得意の爆薬が最大の武器と思い込んでいる。実戦では容赦なくあらゆる物を武器にする。

ムラハチ班一番の力持ち。胸は垂直。自己肯定が低い。

■マーズノイド

ムラハチ班担任教員。いつも仏頂面でダルそうに見える。変わり者の独身女性 30 代。

プライベートがだらしない。坂本一輝の生活スタイルの元凶。

元諜報員でありコネをふんだんに用いてムラハチ班に仕事を与える。

脳内では平和維持の為常に策を練っており、やれる事に尽くしている。

目次

第一部　始動編――007
第二部　ツーチー編――036
第三部　エリカ編――045
第四部　エブリン編――069
第五部　マリ編――079
第六部　ムラハチ班編――093
第七部　リッパー編――100

２０００年代初頭、世界各国は統一国家としてまとめられた。
国家同士が核兵器で殴り合う事など無くなった。
平和が訪れると誰もが思っていたのだ。
しかし、国同士の戦争が終わった後に現れたのはテロリズムや犯罪組織による紛争だった。
ＰＭＣと呼ばれる民間軍事会社の需要は上がり、傭兵業は発展した。
さらに人材不足により国家さえ軍事の一部を民間に委託するしかなくなった。
そうして一部の学生が専門の学校で軍事業を教わる様になってしまった。
それぞれ様々な事情でＰＭＣや政府軍や傭兵への就職を目指し軍事科目を受講した学生達は多い。
そうした民間人のうち軍事業を行う事が許可された傭兵ライセンスがＤＯＰＵ。
ＤＯＰＵ（DefenseOps.PrivateUnit）「防衛作戦従事民間委託部隊」
仕事として人を殺し、報酬を得る。
百合帝（ゆりだい）高等戦術女子学園、それは軍事科目の専門校。
その学園内でＤＯＰＵライセンスを持つ傭兵部隊は公民問わず戦闘に従事している。
その内の一つに評判が良い優秀な部隊があった。
コールサイン、リッパーはその部隊のリーダーをしており仲間思いで優秀な学生。
彼女の仲間は高飛車でエンジョイ派の「エリカ」
無線や電子戦技能に優れているが意地悪な「ツーチー」
おっとりとした性格だが狙撃の達人「エブリン」

大人しい様に見えて爆弾魔の「マリ」
このクラスの担任教員の「マーズノイド」
彼女達は全員変わり者で奇天烈な銃を使っているのもあり校内では浮いた存在だった
それゆえ彼女たちは自らを「ムラハチ班」と名乗り活動している……。

第一部　始動編

学生カバンを片手に歩きなれた通学路を進む。
高い鉄筋コンクリート製の塀で囲まれた校庭脇の桜は散ってしまった。
来年には卒業していると言う実感が風に舞う花びらと共に私を襲う。
思い耽けているとミドルの黒髪が首筋をくすぐる。
塀が途切れていてそこを境に風が強くなったのだ。
校門に着いたと気が付いた私は自分の名前である「坂本一輝」コールサイン「リッパー」と印字された学生証と通行許可証を読み取り機にかざして、開いたゲートから教室に向かう。
タタタンッ！　タタンッ！
射撃場から銃声が響く。
火薬の匂いがここの学生たちの香水だ。
新入生達も慣れてきた事でしょう……。

そのままそそくさと教室へ向かった。
途中の廊下にてのっぽで青髪の学生が大きなダンボールを抱えて歩いていた。
同じ班のエリカだ。
「エリカおはよう？　その荷物なに？」
私に気が付いたエリカはオーバーリアクションを表情であらわした。
その表情は何処か構って貰えて嬉しそうであった。
「リッパーぁ、聞いてよー……」
大体察しが付くが聞いてやろう。
「ツーチーにやらされた？」
「そうなんだよ、私が力持ちで高身長だからってさぁ。いつも重い物運ばせやがって……」
ああ、何時ものじゃれ合いか。
私のクラスメイトは仲良しで遊び盛りな年頃らしい。
「たーくぅ、あのしきりたがりが……」
調子に乗ったエリカがツーチーを指して言っては行けない言葉を口にした。
背後を確認すると一人殺気を帯びた学生が立って居た。
……ツーチーだ！
私はさっと柱に隠れる。
ペチンッ！

エリカの後頭部に輪ゴムが着弾し、彼女らしい可愛げのない悲鳴が上がった。
「イッテェ！」
「エーリーカー？」
割り箸で作った輪ゴム銃を構えたツーチーが現れた。
エリカの発言に激おこと言った表情で近づいて来る。
せっかくだし、私もじゃれ合いに加わっておこう。
「荷物半分持つよ……」
「ありがとー！　リッパー！！」
こうやって日常生活の合間に私たちが年頃の少女だと自覚出来る。
一見しただけならそうだろう。
銃もナイフも持ってなければそうとしか見えない。
だが、元気でお調子者のエリカも、意地悪だが悪気などないツーチーも、そして私も……いつ死ぬか分からない傭兵でしかない……。
命はどうしようもなく安いのだ……。

ダンボールをガレージに置いて教室にたどり着く。
マリは平たい胸を机に押し付けるようにだらけて居た。
うつ伏せてエナジードリンクを片手にスマホでＳＮＳをしている。

一方エブリンはエリカが入ってきたと気がついた途端に端末を片手に近寄った。
そして二人して何かの作品の感想会を開いた。
私はツーチーにあの二人が何の作品の話をしているか尋ねる。
彼女は不穏な笑みを浮かべて答えた……。
「ゆり漫画よ……班の会計当番代わってくれたら教えてあげる、さらに保安当番を代わってくれたらその漫画調達してもいいわよ?」
「もしかして、二人の端末ハッキングして盗み見た?」
「ふふ……どうかしら、ねぇ?」
相も変わらず意地悪でいやらしい女だが、頼りになる上に根は優しい。
そしてチャイムが校内に響きしばらく席で待つ。
担任の「マーズノイド」が現れ、朝礼が始まる。
「早速通告します。
先週、私立佐賀美原戦闘教育学校所属のＤＯＰＵが参加した突入作戦で壊滅された暴力団の三馬組ですが報復として佐賀美原学生を殺害しました。
貴女たちも気を付けなさい」
彼女は表情を崩さず淡々と報告を終え朝礼を続ける。
残念ながらこう言う事はよくある。
そう言う時局なんだから。

そう自分に言い聞かせた。
皆も大して気にも留めてない。
そうして授業が始まると共に、暖かい春の陽光が私に眠気を催させる……。

……それは三時限目が終わった時だった。
私たちムラハチ班に召集命令が下った。
ブリーフィングルームに入り椅子に座って待機し、校長と警察幹部その他が入室した。
ようやく作戦説明が始まり警察幹部が口を開いた。
「よく集まってくれた。今回の作戦には我々の他にも優秀な部隊が必要だ。資料を見てくれ」
机の上には資料が置いてあり、それを開く。
「今回の作戦はテロリストの排除だ。一月前にとある組織が国内に大量破壊兵器の材料を持ち込んだと言う情報が入った。都内の拠点に突入し、それを確保することが任務であり、警察と陸自で作戦を行う。君たちは補助要員として付近に待機して貰う、以上だ。では頼む」

ムラハチ班のガレージまで向かった。
ロッカーの鏡に映った顔が仕事中の顔をしているのを確認し、安堵する。
そして装備品を装着する。
拳銃ホルスターはスカートの下にあるため、いちいち捲らないと拳銃が出せない。

男の子が喜ぶたくし上げとはお世辞にも言えない。私の下着を視認した所で気が付けばあの世だ。
むしろそれを見越して派手だったりスケベな下着で不意を突こうとする学生もいる。
……当てが外れた時の処遇は考えてないらしい。
金属製の箱から愛用のアサルトライフル AK―12を取り出し、動作確認を終え肩紐を肩に通した。
実弾入りの弾倉を点検しながらチェストリグのマガジンポーチに装入する。
太もものホルスターに拳銃Px4を装備。
Ka―BarナイフとMark2ダガーと折り畳みナイフも……。
ツーチーは広帯域多目的無線機を背負い、カービンライフルのミニ14Fを片手にM92FSを太もものホルスターに入れて準備完了。
ふとましい太ももに食い込んだベルト。バストを強調するコルセット型のチェストリグ。まるでアニメのコスチュームだ。
エブリンはオプションたっぷりの軽量ボディアーマー。
父親が狩猟目的で保有していたタイガー狙撃銃。
贈り物で気に入っていると言うスチェッキン機関拳銃。
エリカは甲冑のごとき重量級ボディアーマー。
それにプラスして大昔のイギリス軍が使っていたブレン軽機関銃。
挙句にこれまた大昔のエンフィールドリボルバー。
今度バグパイプでも持たせてみようかしら……。

そして……。

「マリ！　一体何キログラムの爆薬持ってくの？」

あれでは重すぎて途中でバテてしまう。

いつも私がこうやって注意しているのに。

「ご……ごめん、一杯あった方が落ち着くの……」

「半分減らしなさい、足りない安心は私が埋めてあげるから」

マリは背嚢に爆薬、折りたたみスコップ、ピストルベルトのストックホルスターにブローニングハイパワーＭｋ３自動拳銃。

スリングで背負ったチャイナレイクグレネードランチャー。

背丈に似合わないフルオートショットガン Remington7188 を抱えている。

全員準備完了。

さぁ行こう！

ロシアから輸入された軍用の四輪駆動車ティーグルに乗り込む！

都内の某所。

指定された場所である交差点でティーグルをバリケード脇に駐車し降車する。

道路封鎖をしている警察に合流して周囲警戒にあたる。

テロリストの逃走阻止や包囲等をしつつ待機が任務。

だが、何かあれば急行しなければならない。
時刻が深夜２時とは言え今日は蒸し暑い。
アスファルトの上だと余計に熱く感じる。
「リッパーぁ……エンジン回しちゃダメー？　あついよー……」
バリケードに座って双眼鏡を覗いていると運転席のエリカが窓から顔を出して愚痴を垂れてきた。
「駄目、燃料とって置いて……」
クーラーをつけたいと言う駄々を却下し、双眼鏡に目線を戻す。
突然、無線機のインカムが鳴る！
「こちら突入部隊！　敵車両逃走。上野方面へ３両！」
こっちに向かってる……声を張り上げ指示を飛ばす！
「敵接近中！　ムラハチ班戦闘配置！」
各員の「了解」と言う掛け声と共に戦闘のため分散する。
エブリンが我々のティーグルのＰＫＰ車載機銃に実弾を装填した。
全員でバリケード正面を警戒する。
タイヤの擦れる音がする、近い……。
ビルの谷間から軽トラック改造の武装車両が現れ、荷台から重機関銃をぶっ放して来た！
検問所に停めてある警察のパトカーを何台かスクラップにされ、こちらにも弾が来るが四輪駆動車には装甲がある為平気だ。

「止まってー！！」
エブリンが叫びながらＰＫＰで応戦し、武装車両が転倒した！
だが後続の敵はお手製の装甲車でバリケードを突破した！
検問所の警察は車両を全てやられていて私たちが追うしかない。
「むちゃくちゃしやがってぇ！」
「追うわよ！　乗車ぁ！」
エリカが運転席で待ってましたとばかりに四輪駆動車のエンジンを唸らせる！
助手席で荒っぽい運転に耐えていると首都高速道路高架下で敵が見えた！
敵車列最後尾の武装車両にはロシア製対空砲が積んであって流石に徹甲弾で撃たれるのが怖い。
「避けろ！」
ハンドルが切られ反対車線に飛び出す。
砲声がこだまする高架下の柱の向こうに、敵車列が見える。
「速度上げて！　分断する！　マリ！　梱包爆薬用意！」
エリカは一気に加速したかと思えば、Ｈ形の交差点で左右交互のドリフトを行い敵車列中央に躍り出した！
エブリンがＰＫＰで前方の車両を攻撃する中、後ろの対空砲の武装車両に対してマリが後部ドアからＣ４爆薬を投げ込んだ！
武装車両のフロントガラスに張り付いた爆薬を無線で起爆、武装車両を撃破した！

マリはその場で恍惚としていたがエブリンが落とした使用済み弾倉が頭部に直撃し我に帰った。
前方には護衛が居なくなったテロリストの手作り装甲車。
「オラオラぁー!!」
エリカが叫びながらぐっ！　とアクセルを踏み体当たり！
そのままガードレールに装甲車をめり込ませた！
私は助手席から降りて、ドアから這い出てきた敵を射殺すると座席に大きな金属の筒を発見した。
……懐中電灯の光を当てるとその筒の正体が分かり、さすがの私でも恐怖を隠せなかった。

近くのビル裏の駐車場で態勢を立て直す。
テロリストが保有し、突入作戦から逃走したテロリストが持ち出したそれを四輪駆動車の荷台に置くと各員は縮こまっていた。
司令曰く、それを陸自特殊部隊に引き渡すため合流地点まで持って来いとの事だけど……。
荷台にあるそれの筒には「U.S.NuclearRegulatoryCommission Plutonium」という刻印。
「国賊どもが……これをなんとかしなきゃ行けない私たちだっているのよ……」
それを見ながら吐き捨てるように呟く。
「はっーあぁ、17歳の乙女には重過ぎる荷物だーっつの！」
「エリカさん？　こんな荷物運べるんですか！？　もし爆発したら……」
予備戦力の私たちに対する予想外の事態にエブリンが慌てるが、マリがなだめる。

「ダイジョブ、核爆弾は専用の装置にプルトニウムをセットして初めて起爆出来るから、これはプルトニウム単体」
「さすがの知識ね、爆弾魔のマリさん？　自宅のガレージでホンモノ、作っているんじゃない？」
ツーチーのマリに対する煽りの具合に動揺が出ている。
みんなの、特にエリカやエブリンの動揺が隠せない中だけど、やるしかない。
「……みんな、やることは分かっている？　敵は一杯、だけど司令官はそこから離れろと」
私の発言の後、少しの間の後エリカが口を開く。
「……まぁやるしかねぇわな？　運転しやすぜ」
腹を決めたエリカが、茶化しつつ返事を返す。割り切ったようだ。
「やりましょう、リッパーさん。狙撃なら任せて！」
エブリンも特殊戦科らしく落ち着きを取り戻し、やる気を見せた。
「やろうよ、僕になにが出来るか分からないけど」
マリも自信なさげだが同意してくれた。
「ええ、やらなきゃだめよね……ハッキングでもなんでもするわ」
ツーチーはみんなが決心したのを見て、肩の荷が降りた様に了解した。
……。
「……よし、やろう！」
みんな笑顔で決断してくれた、これを無下にしてなにが班長よ。

「まずツーチーは端末で輸送ルートの選定と必要そうな情報の確保。ケツはふいてあげるから何処にでもハッキングしていいわ。エリカ！　車両の点検、ちゃんと合流地点まで走れるようにして！　マリはプルトニウムの様子を見ていて。エブリンは周辺警戒。係れ！！」
「「「了解！」」」

「ツーチー、今回の作戦についてなにか解った？」
　四輪駆動車の荷台備え付けのデスクトップ端末を使用しているツーチーに進捗を伺う。
「ええ、どうやらプルトニウムの持ち主は三馬組の構成員。少し前に情報が流れているわ」
　こないだ警察が踏み込んだヤクザだ……壊滅済みとは聞いていたが裏があるな。
「ただこの前のガサ入れの時三馬組の事務所にはプルトニウムはなかった……その上証拠になりそうな物は作戦上必要な行為で焼失しているの。怪しい事にその時ある学校のＤＯＰＵがロケットランチャーまで持ち込んで事務所にぶっ放していたわ」
「整理すると誰かが三馬組からプルトニウムを奪って、テロリストに渡したはず……」
「……司令部に報告する？」
　……。
「内緒にして、内通者が居たらたまったもんじゃないわ」
　近くで見張りをしていたエブリンから無線機に通信が入る。
「こちらエブリン、秋葉原方面より敵集団。そちらに接近中」

「エリカ、車出せる？」
「何時でも行けますぜ！」
「総員車に集合、乗車して突破する」
……現時刻３時２６分、街はほぼ無人。ひと暴れしよう！

グォオーンッ！！
都心の暗闇からフルスロットルで我々の四輪駆動車が飛び出す、昭和通りを直進すると流石に追手が現れる！
後方、所属不明のアメリカ製軽軍用車のハンヴィー。
どこかの傭兵が雇われたらしい。
銃声を響かせながらこちらを追って来ている。
「来ないでぇ！」
エリカが荒々しく回避運転する中、エブリンは悲鳴を上げておきながら的確に機銃で敵を撃ち抜き、コントロールを失った敵軍用車両がビルへ体当たりする。
その時、エブリンが何かに気がつく！
「前方車線、敵歩兵います！　……え？ロケットランチャーが！」
これは不味い、思わず叫ぶ！
「エリカぁ！　避けろぉ！」

「うおおぉ！？」
噴煙を纏いながら直進するそれは真横の地面で爆発し、タイヤがパンクした！
揺れる車内、エリカが必死にステアリングと格闘する。
ドンッ！！
コンビニ側面に叩き付けられるも衝撃を受け止め、何とか我々は逃げ込めた……。
「全員無事か？」
ドアから外へ出て状況を確認する。
「はい、みんな怪我はしてないです」
エブリンが周囲を警戒しながら答える。
「司令部から、護送車を近くの公園に向かわせるから撤収しろと」
無線機を使っていたツーチーがティーグルから出てきて服の汚れを払いながら私に言う。
ツーチーが手にした地図の一画を指差す。
マリがプルトニウムを所持しているのを確認し出発する！
「よし、行くぞ！」
しばらく裏路地を進むと、ＳＰＣボディーアーマーにＳＣＡＲ－Ｌアサルトライフルを装備した何処かギャルっぽい女子高生達が現れた、あの装備は佐賀美原のＤＯＰＵ。
「百合台のＤＯＰＵでしょ？　援護するからついて来て～」
リーダー格らしい佐賀美原学生がこちらにゆっくり近づく。

増援部隊か？
しかし……ツーチーから殺気を感じ振り返る。
「……貴女達、敵よね？」
ツーチーの一言で場が緊迫し、佐賀美原学生達がこちらを睨む。
「ハッキングさせて貰ったわ、ガサ入れの前に三馬組を襲撃してプルトニウムを奪ったわね？」
「……あーあ、ばれちゃった。ウケるんだけど……」
彼女は一切笑う素振りを見せずに腰のＧ１８Ｃ拳銃に手をつける。
「言っとくけどぉ……契約先が手に入れたプルトニウムを三馬組が横から掠め取ったから、アタシらが仕事として奪っただけだしぃ……これも仕事なんだよ！！」
リーダー格の学生の発言と共に佐賀美原学生が一斉にこちらに銃を向ける！
ピンチだが、カンの鋭いマリが煙幕手榴弾を足元から転がし、煙がお互いを塞いだ！
乱戦を避けてそそくさと後退する。
撃ち合いの中、私は牽制射撃しつつみんなと遮蔽物へ隠れた。
「エリカ、プルトニウムとみんなを頼む！」
「リッパー！　どうするつもりだ！？」
「私はここでしんがりをする、護送車まで走れ！」
「……」
エリカはこっちをジッと見つめて困惑していた。

「良いから行け」
私は淡々と命令する。
「……了解」
エリカと共に皆が公園に向かう。
プルトニウムを持ち帰り、みんなを生きて帰すにはこれが一番だろう……。
それに……私はまだ暴れ足りない。
AK―12に新しい弾倉を装填し、壁から顔を出して伺うと敵は警戒しながらこっちに近づいてくる。
バッと飛び出して射撃する！！
パンッ！　パパンッ！
敵の防弾チョッキを避けて足や頭を狙い、少なくとも一人の頭を撃ちぬいた。
飛び散った彼女の脳漿をちらっと見てしまったが、女子高生らしく叫べばいいのか？
生憎だが相手は今更な女子高生アピールに付き合うつもりがないらしく、こっちにライフル弾を放って来た。
弾倉の残りを乱射して牽制しつつ、足を引きずっている子を殺しておく。
あーあ、時代が時代ならこうやって女子高生同士殺し合いなんかせずに、一緒にクレープでも食べられたのでしょうね。
そう考えながら装填を終え、後退する。
ある程度後退すると公園が見えて来て、護送車はまだ居た。

「リッパー！　無事か！」
エリカの大声で無線機が音割れしてイラッっとしたが、すぐそっちに向かうと返して進む。
十字路を横断しているその時、私に軽トラックが突っ込んできて受け身を取ったが飛ばされてアスファルトの上に転がる！
もうろうとした意識の中、無線機が私を呼ぶ声を鳴らし、護送車は私を待って戦闘中だった。
這いつくばって向かおうとするも左腕が上手く動かない、骨折だ。
無線機のスイッチを入れ、最後の気力で喋る。
「……早く……行け」
そのまま、地面に倒れたまま、護送車が走り出す音を聞きながら意識が途切れる。

いまから６年前。
私は浮浪児だった。
日本政府に引き取られ「坂本一輝」という名前を与えられた。
だが、その条件として海自の人体実験に協力を強制される。
このまま埋もれて死ぬのはヤダ、そう覚悟して私は坂本一輝という身分を手にした。
そうして私は投薬によって身体能力を拡張した覚醒兵の一人になった。
同じ実験体グループの浮浪児は私含め１２名。

誰もが所定の期限が過ぎても不合格の失敗品でしかなかった。
病院に送られた時、処分されてしまうと全員思い込んだ。
だが震える中行われたのはただの健康診断だった……。
そののち、下された命令は記憶処置の後社会復帰。
此処での全ての記憶を装置で忘れた上で生きる事だと。
みんなして歓喜に酔う。
なにをしよう？　どんな仕事が出来るかな？　と。
私は保育士になりたい！
俺は大金持ちになってやる！
だが私はなにをして何者になるかなど思いつかなかった。
言い出せないまま記憶処置が始まった……。
みんな他人の善意によって救われる。
しかし、それが自らの物では無い故に、誰も救われなかったのだろう。
私達は自分では何も決められなくて。
その弱い存在に神から試練が下った。
記憶が残ったまま処置が中断されて、何が起こったか分からなかった。
しかし、ガラスの壁の向こうを見て異常事態だと気が付いた。
……警報が響く中、バケモノが暴れていた。

研究所の所員同士の会話をまとめると私と同じグループの子が装置のエラーにより発狂。
同時に投薬の効果が発現し殺戮を尽くしていると……。
セーフルームのガラス越しに私以外のみんなを殺し尽くすバケモノに私の心は不思議と恐怖など感じなかった。
ゾク……ゾク……
ドキンッ！　ドキンッ！
高鳴る鼓動と唸る意識に覆われた私はこれまで感じなかった充足感で一杯になり警備員の死体からサバイバルナイフを拝借して、ガラスの壁の向こうへ踏み込んだ！
バケモノがこちらを睨みつけ唸り威嚇する……。
ああ、この状況。堪らない！
過呼吸の私はただ快楽にかまけて衝動のままナイフを持って走った！！
……。
フーッ！　フーッ！
しばらくして自ら発している異常な呼吸音で正気に戻る。
バケモノは死に、点滅する蛍光灯の下に骸を晒している。
周りに散らばったみんなだった物は無力に動かず。
命はどうしようもなく安いと私に訴える。
善意など一つの狂気で蹴散らされた。

バケモノの千切れた腕が私を掴んでいた「置いてかないで」とでも言いたげに。
私は何も考えずただただボーっとそれを見ていた……。
私は殺戮衝動で発現した身体能力によって海自を追われた。
殺処分前の坂本一輝という少女を引き取ったのが百合帝戦術高等学園の教師「マーズノイド」だった。
そこで孤独でいた私に声をかけたのは「ツーチー」というコールサインの学生だった。
彼女と話し、友達が増えていくにつれ私の中で凍りつくように閉じ篭っていた物がゆっくりと溶け出していく。
やがて傭兵として戦闘を行うライセンスが私達に与えられる時にマーズノイドとの面接で私はこう言った。
「私の力で仲間を守り、任務を遂行します。もう他人の善意や悪意で振り回されたく無い」
と……。

……ここは何処だろう？
視界はぼやけ、頭は鈍い痛みを訴える。
見た限り廃墟の一室らしくコンクリートの壁と金属の扉に私は閉じ込められている。
どうやら両手首を鎖で縛られて骨折した左腕ごと吊るされているらしい。
足音と共にドアの向こうから話声が聞こえる……。
「パパ！　あんな女早く殺した方がいいわよ！？」

「あの女は政府の極秘実験の検体だ、出来れば博士の土産にしたい」
ギィィィ……
ドアから男と先程のＤＯＰＵ達のリーダーの一人が入ってきた。
私をジッと見定める様に睨んできた彼女の胸のネームプレートには「金田ハルカ」と記入されていた。
男の方が私に尋ねる。
「百合台高等戦術学園所属のリッパー、本名坂本一輝だな？」
「……」
「お前の過去は知ってる、覚醒兵とやらにされた哀れなモルモット……知り合いが欲しいと言うからくれてやる」
「うっわぁ、マジきしょい。こいつ人間なの？」
したり顔で罵る金田ハルカの態度が気に食わない。
睨み付けて威嚇すると彼女は鉄パイプを握り私に振りかざした！
ゴッ！
「ぐぇ……っ！」
左腕の骨折し内出血している部分に鉄パイプを叩き付けられ私の口から悲鳴が漏れる。
「……このっ！　実験動物のクセに……！」
ゴスッ！！
今度は脇腹を殴打され強い痛みが身体に響く……。

「あぅ！　はぁはぁ……そっちこそ、成り上がりの癖に……イキりやがってッ！」
「こんのっ、まだやんのかぁ！？」
スッ……
ガッ！！
「おぅッ……ふぁ……」
拳がお腹にめり込む！
……痛い、拷問されてやめて下さいなど言いたくは無いがさすがに応える……。
とにかく時間を稼ごう。
まだ絶望するには早い。
そう、この位で相手も満足しないでしょうし。
その時！　爆発音を皮切りに銃声が響く！
「なに！？　あんたの仲間？」
「ほう、わたしはここいらで帰らせて貰おうか」
「ちょ！　パパ置いていかないで！」
男がそそくさとドアから退場し、さっきまで調子こいてた金田ハルカは狼狽しながらそのあとを追う。
銃声が近づいてきて一人の傭兵が現れる、ツーチーだ！
「大丈夫？　リッパー？」
「ぁあ、いいタイミングだった……」

「行きましょう、皆が待っているわ！」
ツーチーに肩を貸してもらい部屋を後にする。
目の前に外が広がる。
だが後ろから敵が迫って来た！
ダンッ！！
狙撃銃の銃声が響く、エブリンだな？
「こっちだ！　リッパー！！」
エリカが大声を張り上げ私を待っている、彼女はゲームのようにブレンガンを腰だめで乱射し、傍にいるマリは防弾シールドを持ち同じく敵に応戦している！
ふらつく足取りをみんなに支えられて歩み、何とか彼女達と合流した。
「大丈夫ですか？」
エブリンが私の瞳を覗き込み、私は「敵は？」と尋ねる。
「片付きましたよ。お疲れ様です」
「良かった……」
ふと横に視線をやると地面に倒れてる死にかけの佐賀美学生がこちらを銃で狙っていた……！
エブリンのホルスターから拳銃を借りて彼女を手で突き放す！
だめ、間に合わない……。
ボスンッ！

響いた間の抜けた銃声は現代の物ではなく時代遅れの黒色火薬の炸裂音だった……。
薄っすら茶色い消炎を纏いマーズノイドが現れ、さも当然のようにドライゼ銃に弾を装填していた。
安堵でため息が口から漏れる。
「はぁ……」
「私を見た瞬間にため息ですか？　私のどこが可笑しい？」
「いいえ、ところで……逃げた人間は？」
「一人は防弾リムジンでどこかに消えた、あとは佐賀美学生が一人徒歩でそれを追っかけていた。追うなら今だぞ」
「行くの、そのケガで？」
マリが心配そうにこちらを見つめる。
……。
「大丈夫よ、こう見えても頑丈な女だからね」
「うん、帰ってきてね！」
ツーチーから私のナイフを受け取って私は彼女を追う。
……何にだってケジメは必要なのよ。
蛍光灯がチカチカと煩いトンネルの途中、金田ハルカが居た。
彼女はすぐに私に気が付いて、長い弾倉が伸びたＧ１８Ｃ機関拳銃を向け叫んだ！

「あんた何なのよ！？　マジでムカつく……殺してやる……！！」
「足りない……」
「はぁ？」
「……殺意が足りない」
そう、殺意だ……こいつは私が殺す！
「ざっけんな！」
金田ハルカの銃は私の頭を狙い、グリップがギュッっと握られて力任せに引き金が絞られた。
タイミングがバレバレなのよ、このお姫様が。
パパパパパパパッン！
「え……？」
さも当たり前の様にどの弾も私には当たらず、右手のナイフで文字通り周囲に弾かれた。
私の手に握られたズタズタに傷ついたナイフを地面に落とすと、鈍い金属音がトンネルに響く。
「貴女、まだ二桁も殺してないのね」
腰の鞘からマークⅡダガーを抜き、金田ハルカに突っ込む！
困惑したままの彼女の脇から肺に向かって思いっきりナイフが刺さる、だが同時に私の頭部が拳銃で殴打される。
だけど弱い！
咄嗟にふらつく視界のまま左手で殴ってきた腕を掴むと折り畳みナイフを抜き、彼女の右腕の腱を断

ち、右膝で蹴る！
蹴られた勢いで地面に倒れた金田ハルカは、恐怖の目線を私に向けたまま何とか逃げようと狼狽し始めた。
「まぁ〝まっでぇ……あんたパパが誰だか知らないのよぉ！　企業連合の役員よぉ？　わだじを殺せば……！」
私は金田ハルカに近づき、一生懸命な瞳を見下ろす。
「そっか……でも、ここに貴女のエンコウ相手は居ないの」
踵を思いっ切り彼女の右肩に叩き込み、関節の外れる鈍い音が響いた。
「がっあぁぁあぁ！？　いだいっ！！　ヤダぁ！」
右手首を引っ張り、顎に土踏まずを当てがい、そっと体重を乗せ彼女を殺す。
ゴギィッ！
「……」
さっきまで流暢に命乞いをしていた彼女は口を開けたまま何も喋らない。
「貴女がたの様な国賊の相手をしなきゃいけない、私みたいな汚れ仕事の気持ちも考えなさいよ……疲れるじゃない……」
呼吸を整えた後、殺人衝動が満たされた私はうっすらと笑う。
でも頭痛がする、まだ物足りなくて苦しい。
仲間、部隊の皆にはこんな所見せられない。海自のときの様な村八分などごめんだわ……。

事件から一ヶ月後、神奈川県湘南にて。
ビーチパラソルの下、椅子に腰掛けてペットボトルのジュースを仰ぎ飲んでいる。
すると携帯にマーズノイドから着信が来たので電話に出た。
「どうですか、湘南は？」
「パリピが多くて私みたいな陰キャラにはしんどい……自宅で一人酒盛りをしている先生が羨ましい」
私がマイクに向かって本音を返す。
マーズノイドがクスッと笑い、話を続ける。
「その様子なら楽しんでいますね、本件の最終報告をムラハチ班の班長の貴女に報告します。まず私立佐賀美原戦闘教育学校は解体処分です。傭兵ライセンス持ちのＤＯＰＵといえどテロリストの片棒を担いだのがまずかったようです。次に鹿場内閣が動きました。今回の件で佐賀美原にプルトニウムの搬入と奪還を命じた企業連合に対し政府はやる気です。政府直々に各ＰＭＣや戦術学校にどちらに付くか決めろとお達しが来ました。
近いうちに戦争が始まります。最後の休暇になりそうですのでゆっくりするように。以上です」
「解ったわ……ありがとう」
電話を切って海岸を見渡すと部隊の皆は水鉄砲で撃ちあっていた。
どうせ実弾入りの銃から海水を発射する銃に変わっただけ、何も変わってない。
これが私たちの生きざまだ……。